



明日はきのこを

食べようプロジェクト

「きのこ消費量2倍」。この目標を掲げ、「信州つけ焼そば」の提案やイベントで消費宣伝ブースの出展など、きのこの魅力を自由な発想で伝える人たちがいます。

今回は、若手のきのこ生産者が中心に参加する「明日はきのこを食べようプロジェクト（あすきのこ）」について、お話を聞きました。

○きのこ消費量2倍を目指す

きのこには、美容と健康に良い「キノコキトサン」「エノキタケリノール酸」「食物繊維」などの成分が多く含まれています。きのこを通して健康と美容を届け、社会の幸せを実現するという思いから「明日はきのこを食べようプロジェクト」、略して「あすきのこ」が生まれました。

きのこの魅力が広まり、さまざまなきのこが使用され、きのこの消費量を全国で2倍にすることを目標にしています。

○きのこの新たな商品を提案

2月に千葉県幕張メッセで開催された「スーパーマーケット・トレードショー」で、きのこの消費宣伝ブースを出展しました。このようなイベントでバイヤーから「きのこの新し

▶そのまま調理できる「カットえのき」

▶すぐ使える「包丁いらすのえのき茸」



い商品」のヒントを得ます。消費者との対話の中で「家事の手間を減らしたい」などの声を受け、それを参考に「調理しやすいキノコ」の商品開発などにつなげています。

きのこの機能性を多くの人に知ってもらうために、市場の中で研究を重ね、いろいろな提案をしていきました。

○市民の皆さんへ

昨年からのきのこをたくさん使用した「信州つけ焼そば」を提案しています。もともと地域で愛されていたグルメということもあって反響が良かったです。このような活動を継続的に、また交流の輪を広げていくようにすることが大事だと思います。

中野市は日本一のきのこ産地です。誰かに物の良さを伝えるときに、近くの人たちがその魅力を感じていないと気持ちを伝える力は弱くなります。市内で、このプロジェクトが盛り上がりつつあれば、市外へも発信しやすくなると思いますので、応援をお願いします。

広報クイズ

■今月のプレゼント

「奈良由起夫さん制作の中野土人形（綱狎）」…2人

問題

土人形絵付けコンテストの応募総数は？ 「●●●点」

クイズの答え、住所、氏名、年齢、電話番号、世帯主名を記入の上、今月の広報で参考になった記事、今後知りたい情報などをはがきに書いて、次の宛先までご応募ください。

締め切り 3月28日(水)必着

※当選はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

先月号の答え 高社山から切り出し、新庁舎の天井ルーバーに使用している木の種類は？
答え・・・「カラマツ」

383-8614

(住所記載不要)

中野市庶務課

秘書広報係 行

住所・氏名・年齢・
電話番号・世帯主

市民リレー元気の輪

No.38

竹内房枝さん
からのご紹介



○自己紹介

約50年前、中野小学校グラウンドで朝に行っていた「おはようママさん」からバレーボール競技の普及に取り組んでいました。当時、農業を営みながら、バレーボールをグラウンドで砂ぼこりと強い風が吹く中でやっていたことが印象に残っています。

また、中野市体育協会の先輩や仲間と「ママさんバレー」を立ち上げ、バレーボールの指導や大会に関わる中で、いろいろな人と出会うことができました。ママさんバレーの指導者を引退した後ですが、日本体育大学のバレー部が中野市民体育館で練習した際に関わることもでき、そこで出会った有名な選手やコーチとの交

流は人生の宝物です。

今は、モモのハウス栽培やシャインマスカットなどの果樹栽培に打ち込んでいます。



▲湯本さんが育てる黄金桃（ハウス栽培）の花に受粉するミツバチ

○元気の秘訣

昔から運動することが好きで、バレーボール以外に早起き野球やスキーのインストラクターなどもやっています。今もマレットゴルフをしています。ギターも趣味でやっています。ボランテニアでイベントにも出演しています。このように、いろいろなことをやることと、晩酌が元気の秘訣です。

○おらほの自慢

竹原は農業が盛んで、後継者も多いです。農業技術の向上にも意欲的なので、これからの農業の発展が楽しみです。また、夜間瀬川沿いの桜並木が見事です。電車と高社山と桜の組み合わせを撮ろうと写真家が訪れる姿も見られます。マレットゴルフをやりながら桜を眺めることができるので、開花の時期には、花見にお越しください。



湯本 剛弘 さん（竹原）

池田市長の

わくわくレポート

vol. 50



新年度に向けて

2月13日、新庁舎が開庁した。保健センターならびに教育委員会が新庁舎に入り、一つ所での業務体制が整った。防災拠点として、市民に開かれた庁舎として、中野市の新たな歩みを進めることになった。これらが本場に市民サービスが良くなったかどうか問われる。

四半世紀前になるが、評論家でノンフィクション作家の草柳大蔵さんに「型ができて血が入って形になる」と言われたことがある。新庁舎も職員一人ひとりが新たな気持ちで、業務に取り組むことが大切だ。

平成29年度も残すところあとわずかとなったが、時代の環境は人口減少と少子高齢化の流れが一段と加速している。こうした環境変化にあっ、地域の元気を創出するために地域力向上に向け、全国の自治体ではさまざまな取り組みが行われているが、私たちは時代のトレンドをよく観察する必要があるので、地域ごとにそ



の環境は異なる。とりわけ地域力とは、そこに住まい、暮らす人の力が源泉である。地域再生の鍵は「多様性」「包摂」「持続可能性」と言われているが、いずれも人を中心に考えると分かりやすい。地域は多様な人、多様な考えを受け入れ、それら人々を繋ぎ、自立した持続可能性のある行動や事業展開を推進する必要がある。あくまでもそこにあるのは主体的に取り組む人が中心である。AIやIoTといった情報技術は人のアイデアや着想、在りたいと思う地域社会づくりへの熱い思いがあつてこそ生かされると思う。

3月は待ちに待った春が到来する。「ひな市」は中野市を代表するお祭りであり、毎年遠方より多くのお客様が来市される。こうしたお祭りの在りようを考える上でも、情報技術の活用は私たち地域社会に、時間と空間を超えて、幅広く人と人を繋ぐ手段を与えてくれるはずである。人口が減少し少子高齢化になっても、より強固なネットワークを作り上げ、共感を呼び込み、協働できる地域社会は必ずできる。また、創造に向けて挑戦を続けることが大切だ。